



日本 CLIL 教育学会第 4 回大会

The 4th J-CLIL Annual Bilingual Conference

2021 年 10 月 9 日(土) 10:00-18:00

Saturday, 9 October 2021

オンライン(ズーム)

Online (Zoom)

「日本の CLIL: 次の 10 年に向けて」

‘Towards the second decade of CLIL in Japan’

大会プログラム

Conference programme

10:00-10:05 (Zoom 1)	開会挨拶：笹島茂 (J-CLIL 会長) Opening greetings: Shigeru Sasajima (J-CLIL president) [Bilingual]
10:05-10:45 (Zoom 1)	CLIL 実態調査報告 1：実態調査委員会 (笹島茂、藏本真衣他) CLIL survey report 1: CLIL survey committee (Shigeru Sasajima, Mai Kuramoto, et al.) [Japanese]
10:45-11:05 (Zoom 1)	CLIL 教員研修プログラム(CTEP)公開：笹島茂、ブライアン・ショー、中井理恵 Unveiling CLIL Teacher Education Program (CTEP): Shigeru Sasajima, Brian Shaw, & Rie Nakai [Bilingual]
11:15-12:00 (Zoom 1)	会員講演：土屋慶子「これまでの CLIL、これからの CLIL」 J-CLIL member talk: Keiko Tsuchiya, ‘CLIL so far, CLIL hereafter’ [Japanese with English slides and subtitles]
12:00-12:25	昼食 Lunch
12:25-12:55 (Zoom 1)	賛助会員発表 Supporting members’ presentations [Bilingual]
13:00-16:40 (Zoom 1, 2, 3)	会員発表 1~22、CLIL 実態調査報告 2 (高等教育機関) 多言語 + 日本語 CLIL フォーラム Members’ presentations 1-22 [Japanese, English] CLIL survey report 2 (Higher institutions) [Japanese] East Asia & Japanese CLIL forum [Japanese]
16:50-17:50 (Zoom 1)	招待講演：デイヴィッド・マーシュ(フィンランド)「CLIL で未来を創る」 講演者紹介：池田真 (J-CLIL 副会長) Plenary talk: David Marsh (Finland), ‘Shaping the future with CLIL’ [English] Introduced by Makoto Ikeda (J-CLIL vice president)
17:50-18:00 (Zoom 1)	閉会挨拶：バリー・カバナ (J-CLIL 副会長) Concluding remarks: Barry Kavanagh (J-CLIL vice president) [Bilingual]

午前中のセッション Morning sessions

Zoom room 1		
* Zoom接続情報は会員及び参加登録者に配信済み Zoom access information has already been distributed to members and registered participants.		
10:00-10:05	開会挨拶：笹島茂 (J-CLIL 会長) Opening greetings: Shigeru Sasajima (J-CLIL president)	2 言語 Bilingual
10:05-10:45	CLIL 実態調査報告 1：実態調査委員会（笹島茂、藏本真衣他） CLIL survey report 1: CLIL survey committee (Shigeru Sasajima, Mai Kuramoto, et al.) 日本 CLIL 教育学会 (J-CLIL) の実態調査委員会が、日本国内の高等教育機関、初等中等教育機関、幼稚園・英会話学校等、そして英語以外の言語の教育関係者を対象に実施した CLIL 実態調査（2020 年 12 月末～2021 年 4 月末に実施）の結果について報告します。CLIL というヨーロッパ発信の教育方法が、実践的に日本に導入され、約 10 年強の歳月が過ぎました。本調査は、ようやく定着する初期段階に至っている現時点で、実際にどのように実践されているかを把握することを目的に実施されました。各教育機関の現状を踏まえて今後の課題を考察しながら、CLIL が日本でどのように発展するのが望ましいかを探求していきます。本調査にご協力頂いた皆様に深く感謝申し上げます。	日本語 Japanese
10:45-11:05	CLIL 教員研修プログラム (CTEP) 公開：笹島茂、ブライアン・ショー、中井理恵 Unveiling CLIL Teacher Education Program (CTEP): Shigeru Sasajima, Brian Shaw, & Rie Nakai J-CLIL will start the CLIL Teacher Education Program (CTEP) in 2022. CTEP aims to help teachers and teacher trainees develop their CLIL knowledge and skills for the Japanese educational context. It is accredited by J-CLIL and managed by CLIL-ITE (Institute of Teacher Education). The program includes 6 modules: CLIL teaching methodology, CLIL lesson study, CLIL classroom management, CLIL activities, CLIL classroom language use, and English language teaching (ELT) and CLIL pedagogy. In order to start this program, J-CLIL needs your cooperation and support for the startup funding. We will demonstrate the program concept, outline, curriculum and road map of CTEP in the presentation.	2 言語 Bilingual
11:15-12:00	会員講演：土屋慶子（横浜市立大学） 「これまでの CLIL、これからの CLIL—CLIL 関連理論を読み解く」 J-CLIL member talk: Keiko Tsuchiya (Yokohama City University) ‘CLIL so far, CLIL hereafter: Understanding CLIL and related theories’ CLIL は「(社会的) 表象の統制と文化の (再) 生産」を実現する“教育装置” (Bernstein, 2000, p. 201, 筆者訳)である。10 年目の節目に、本発表では 4 Cs に則して日本の CLIL のこれまでを振り返り、現状を描写し、未来を遠望する。これまでは英語のクラスが CLIL の主な実践場であったが、多言語・多教科教育での CLIL が今後より進むであろう (Content)。CLIL の “3 つの言語”に続き、現在“トランスランゲージング”や“認知談話機能”、“複合リテラシー (<i>pluriliteracies teaching for learning</i>)” (Meyer & Coyle, 2017) の概念が既に導入されつつあり、“トランスセミオタイジング (<i>trans-semiotising</i> , 多様な記号資源使用)” (Lin, 2015; Sasajima, 2020) もそれに加わるであろう (Communication)。“HOTS/LOTS” (高次/低次思考力)、“コンピテンシーを基とした教育” (Ikeda, 2019)、“主体” (Mehisto, Marsh, & Frigols, 2008) などの概念も、日本の CLIL に浸透しつつある。さらに“集団的能力 (<i>collective competency</i>)”, (Lingard, 2012) や “拡張する主体 (<i>distributed agency</i>)” (Enfield, 2017) といった考えも取り入れられるであろう (Cognition, Culture/Community)。	日本語 Japanese with English slides and subtitles

	<p>即ち共同主体による多言語的でマルチモーダルな実践が、日本およびその他地域においても、未来の CLIL では重要となるであろう。</p> <p>CLIL is a <i>pedagogic device</i>, which realises "symbolic control and cultural (re)production" (Bernstein, 2000, p. 201). At the 10th anniversary of its arrival, this talk reviews CLIL in Japan in the past decade, describes its current state, and foresees its future in Japanese education with the 4Cs. English classrooms have been the main platform of the CLIL implementation so far, which will be more multilingual and cross-curricular (Content). After the <i>language triptych</i>, the concepts of <i>translanguaging</i>, <i>cognitive discourse functions</i> (CDFs) and <i>pluriliteracies teaching for learning</i> (Meyer & Coyle, 2017) have been introduced now, <i>trans-semiotising</i> (Lin, 2015; Sasajima, 2020) are in the queue (Communication). CLIL practitioners in Japan are also familiar with <i>HOTS/LOTS</i> (high/low order thinking skills), <i>competency-based education</i> (Ikeda, 2019) and <i>agency</i> (Mehisto, Marsh, & Frigols, 2008) already. The ideas of <i>collective competence</i> (Lingard, 2012) and <i>distributed agency</i> (Enfield, 2017) could be also taken into their practice (Cognition and Culture/Community). Thus, <i>multilingual</i>, <i>multimodal</i> and <i>multiparty agency</i> (3M) can be a key to the future CLIL in Japan and beyond.</p>	
12:00-12:25	<p>昼食</p> <p>Lunch</p>	
12:25-12:55	<p>賛助会員発表</p> <p>Supporting members' presentations</p>	2 言語 Bilingual

午後のセッション Afternoon sessions

Zoom room 1		
* Zoom接続情報は会員及び参加登録者に配信済み Zoom access information has already been distributed to members and registered participants.		
13:00-13:45	<p>CLIL 実態調査報告 2：高等教育機関（蔵本真衣、仲谷都、油木田美由紀）</p> <p>CLIL survey report 2: Higher institutions (Mai Kuramoto, Miyako Nakaya, Miyuki Yukita)</p> <p>午前中に報告される「CLIL 実態調査 1」の高等教育機関（主に大学）のアンケート結果について、更に詳しい調査結果を報告いたします。参加者の皆さんと意見交換しながら、今後の高等教育機関の CLIL 授業について一緒に考えます。本調査では、各アンケート項目に「教員歴」と「CLIL 実践度」を対象にクロス集計し、分析しております。実態調査のアンケート項目は以下のとおりです：実践教員、実践頻度、授業内の導入割合、使用言語、授業内容、教材、授業の工夫、授業評価、話題性、効果、授業担当者、カリキュラム内の（CLIL 授業の）立ち位置、英語と各専門科目の教員の連携、回答者自身や同僚・学生などの変化、実践の動機、現在の授業課題等。</p>	日本語 Japanese
13:50-14:10	<p>会員発表 1: 杉橋朝子（昭和女子大学）</p> <p>「実践的ビジネスコミュニケーションと異文化対応の育成—英文メールを Discussion して書く」</p> <p>担当の大学 3 年生・4 年生を対象としたビジネス英語授業での取り組みを発表する。JACET と IIBC の共同研究によれば、ビジネスの場で最も必要な英語コミュニケーション力は、「話す・聞く」では電話対応に次ぎ会議、「読む・書く」ではメールである（2015）。会議は意見交換だけではなく、疑問点をその場で解決し他のメンバーにも配慮するなど高難度である。これらの適応力をつけるため、実際に会議を行う様子を観察し、学生個人の発言や態度、グループのコミュニケーションの取り方をテストした。トピックはある条件下のメールを書く課題とし、グループで提出する形にした。オンライ</p>	日本語 Japanese

	<p>ンを効果的に使用するグループも現れ会議は順調だったが、受け手への配慮不足やステレオタイプで他人を判断するなど、メールに課題が残った。来年度に向け改善点を考えたい。</p>	
14:15-14:35	<p>会員発表 2: 安部由紀子 (J-CLIL 運営委員)</p> <p>「談話分析 (Discourse Analysis) からの CLIL 教育—オバマ元大統領の広島スピーチを事例に」</p> <p>ジャーナリスト出身で、広報専門家である実務家教員の発表者が、高等教育機関で英語を専攻する学生向けに実施した、談話分析 (Discourse Analysis) を用いた CLIL 教育の事例を紹介する。オバマ元大統領の広島訪問時(2016 年 5 月)の英語スピーチを中心に、トルーマン元大統領が広島に原爆投下直後に行った英語スピーチを比較検証しながら、1) 英語、2) 談話分析 (Discourse Analysis) 3) スピーチライティング 4) 平和、外交、戦後の世界情勢の変化などを CLIL 教育のアプローチで指導した。クラスを通じて、政治家の英語スピーチを言葉通りに受け止めるのではなく、その背景にある政治的意図、配慮、パブリックディプロマシー (対市民向けの外交)、戦後の日米関係の変化などを読み解く力、クリティカル・シンキングできる汎用的な能力構築を目指した。</p>	日本語 Japanese
14:40-15:00	<p>会員発表 3: 富永裕子 (清泉女学院大学)、Akiko Sharp (カルガリー大学)</p> <p>「英語学習者と日本語学習者の協働学習の可能性—Virtual Exchange Program の実践から」</p> <p>本発表は、CLIL を念頭に、2021 年 5 月にカナダの大学で日本語を学ぶ学生と日本の大学で英語を学ぶ学生を対象に実施した Virtual Exchange Program の (90 分×7 回) の実践報告である。新型コロナウイルスの影響で多くの学生が計画していた留学をキャンセルせざるを得ない状況となり、対面を前提にしていた留学生との国際交流の機会は立ち消えになっているのが現状である中、オンラインだからこそできる授業を工夫し Virtual Exchange Program を計画した。あるテーマについて、セッションごとに使用言語を入れ替えながらお互いの学習目標言語を支援し、協働作業を通して達成したタスクや学生の自己評価などについて報告する。</p>	日本語 Japanese
15:05-15:25	<p>会員発表 4: 津田晶子 (中村学園大学)、仁後亮介 (中村学園大学)</p> <p>「留学生と日本人学生がともに学ぶ食育英語の CLIL」</p> <p>本発表では、栄養教員、調理教員、英語教員が、日本人大学生と留学生を対象に、多文化共生の立場から、健やかな食生活を提案するために実施したセミナーを報告する。事前アンケートより、多くの参加者が初めての自炊生活を経験し、また、コロナ禍の中で自分の健康と真剣に向き合っていることがうかがえた。本セミナーをもとに、「栄養」「調理」の content teacher と「英語」の language teacher の協業のあり方、フードダイバシティに考慮した多文化共生のための食育英語の CLIL のニーズ分析、教材およびプログラム開発について提案する。</p> <p>※本研究は科研費基盤研究「留学生と日本人学生の多文化間共修による食育英語の CLIL: ニーズ分析と教材開発」(19K00900) の助成を受けた。</p>	日本語 Japanese
15:30-15:50	<p>会員発表 5: 深川美帆 (金沢大学)</p> <p>「上級日本語クラスでの CLIL の実践—AI をテーマとして」</p> <p>日本国内の大学における留学生を対象とした上級レベルの日本語クラスで、AI と社会をテーマとした CLIL の実践を行った。授業は、AI についての文章・映像の理解、それらを読解・視聴してのディスカッション、授業を通して考えたことを書く課題から成る。AI に関する知識・内容について目標言語である日本語で学ぶことで、特に言語面においてどのような学びがあったかを、授業および課題での言語産出とクイズによる理解確認により考察した。その結果、学習後は語彙の正確さが増したこと、トピックについての共同作業や多</p>	日本語 Japanese

	<p>様な思考活動での言語産出が観察されたことから、この実践が学習者の内容面と言語面において学びを促したことが示唆された。</p>	
15:55-16:40	<p>多言語＋日本語 CLIL フォーラム：CLIL の実践と課題を共有しましょう（笹島茂） East Asia & Japanese CLIL forum: Let's share CLIL practices and challenges (Shigeru Sasajima)</p> <p>CLIL はもともと多言語多文化を背景とした統合学習である。日本でも英語以外の言語（日本語、スペイン語、フランス語、ドイツ語、中国語、韓国語など）で CLIL は発展している。大会では毎年多言語状況での CLIL を一つのテーマとしてシンポジウムを実施している。その一環として今回も CLIL 状況に関する情報共有を図りたい。日本語教育の話題が中心となるが、多様な状況での CLIL の実態を共有し、今後の活動に生かしたい。まずは、笹島が CLIL 実態調査の結果を簡単に報告する。気楽に参加してください。</p>	日本語 Japanese
16:50-17:50	<p>招待講演：デイヴィッド・マーシュ「CLIL で未来を創る」 講演者紹介：池田真（J-CLIL 副会長） Plenary talk: David Marsh (Finland), 'Shaping the future with CLIL' Introduced by Makoto Ikeda (J-CLIL vice president)</p> <p>The scientific evidence-base on languages, mind and brain has expanded in the last decade. New research is of importance for English language teaching and CLIL. This presentation describes how this research continues to strengthen the position of CLIL as a signature pedagogy, and how future trends are increasingly focusing on creative forms of integrating language and content. A 2020 study reports that there are six significant advantage clusters for people who can think, to a greater or lesser extent, in more than one language. It indicates why successful language learning depends on educational practices that combine opportunities to learn language as a subject, and to learn content through the language. It also further strengthens the argument that learning a language solely as an object of study can no longer be justified in mainstream education. These benefits may be physiological, neurological, and psychological, and they can be linked to teaching and learning methods. This presentation will enable participants to explore which methods may be particularly successful in realizing different benefits when teaching through CLIL. Finally, it examines new forms of curricular integration such as the combination of Phenomenon-based Learning & CLIL.</p> <p style="text-align: center;">David Marsh (Finland)</p> <div data-bbox="632 1464 911 1715" data-label="Image"> </div> <p style="text-align: center;">https://davidmarsh.education</p> <p>David Marsh PhD FRSA has contributed to Finnish educational innovation over three decades. He has experience of tasks in in 50+ countries, contributed to 175 publications, and received 5 degrees from the United Kingdom, Finland and Spain. He co-launched Content and Language Integrated Learning (CLIL) under the auspices of the European Commission in the early 1990s. In 2020 he co-produced <i>The Bilingual Advantage: The Impact of Language Learning on Mind and Brain</i>. During 2021 he is developing competence-based English language learning resources that combine CLIL with transversals across the curriculum. These are being used to raise English language learning standards in historically</p>	英語 English

	low-attainment contexts. His current work-in-progress is <i>The Children of Cyberspace: Towards a New Understanding</i> , due for publication in 2022.	
17:50-18:00	閉会挨拶：バリー・カバナ (J-CLIL 副会長) Concluding remarks: Barry Kavanagh (J-CLIL vice president)	2 言語 Bilingual

Zoom room 2		
* Zoom access information has already been distributed to members and registered participants.		
13:00-13:20	<p>会員発表 6: 岡川靖子 (昭和女子大学) 「小学生への英語指導における英語絵本を活用した CLIL 指導」</p> <p>小学生への英語指導において英語絵本を活用した CLIL 指導を取り入れたいと考え、絵本を導入教材とした授業づくりを研究している。発表では、小学 5 年生を対象にこの夏に行った『Handa's Surprise』という絵本と社会・図工を統合させた 45 分×2 時間のレッスンについての考察を行いたい。また、小学生の認知レベルに合わせた CLIL 指導を行う際、英語学習初心者の小学生への指導では、言葉の壁が立ちほだかることがある。言葉の壁を低くするため、インタラクションを通して児童に「気づき」をより多く与える「scaffolding (足場掛け)」の工夫が必要になるが、今回の実践を基に、授業展開における PDCA サイクルの各段階で、どのように scaffolding を取り入れたかについても発表したい。</p>	日本語 Japanese
13:25-13:45	<p>会員発表 7: 宮崎美帆 (STEAM ENGLISH LAB.)、中村尚子 (UIPM, STEAM ENGLISH LAB.) 「理科実験から英語学習につなげる授業の実践」</p> <p>本発表では、理科の実験と実験レポートの作成が英語学習の動機付けにつながるかについて、実際に小中学生を対象に行った授業の事例を紹介する。身近な題材で実験を行うことで生徒の好奇心が刺激され、書くことや発表することに抵抗がある生徒も自発的にレポートに取り組む姿が見られた。実験レポートは、誰が読んでも正確に理解でき、同じ実験を再現できるものでなければいけない。そのため、論理的かつ簡潔で明白に書くことが求められる。更に、英語で実験レポートを書けるようになるためには、時制、受動態、比較など中学レベルの基礎的な文法理解が必要である。繰り返し実験レポートを書くことは、理科知識の蓄積、論理思考力の深長に繋がるばかりでなく、将来の理系人材に必要な実践的な英語力を培うものと期待される。</p>	日本語 Japanese
13:50-14:10	<p>会員発表 8: 木村祐太 (石川県白山市立北星中学校) 「思考・判断・表現の力の育成のための単元を通じた CLIL の実践—中学 2 年生が「落語」を英語で学ぶ」</p> <p>本発表は「落語」を取り扱った、中学 2 年生の授業での実践である。「思考力・判断力・表現力」の育成を目指し、いかにして単元全体で CLIL を通じて授業の実践ができるかを紹介したい。現在の中学校の教科書の各単元には様々なテーマが設定されており、教科書を学ぶだけでも CLIL が目指すような教科横断的な学習や指導を行うことができる。ただし、深く考えさせるためには、学習事項を定着させることと、いかにして思考させるための単元に関わる情報を与えるかがキーとなってくる。「定着」「内在化」を目標とした授業を行いながらも、単元末には生徒が自由に自分の考えを発信する場面を設定するための単元全体での実践例を紹介する。</p>	日本語 Japanese
14:15-14:35	<p>会員発表 9: 白井龍馬 (横浜女学院中学校高等学校) 「評価の工夫によって主体性を高める試みをした CLIL 授業の実践」</p> <p>CLIL 授業の指導対象は多岐にわたるため、学習目標をしっかりと生徒と共有しておくことの意義は大きい。日本の中等教育では暗黙のうちに学習目標が定期試験や英語外部試験の結果に収斂することがあるため、生徒に非認知能力の伸長や学びのオーナーシップを授業内で意識してもらうためには工夫が必要だ。評価基準の工夫と共有が対応策としてありうるが、そのためにはまず「評価＝権威ある主</p>	日本語 Japanese

	<p>体からの一元的な価値の決定」という固定観念から生徒を解き放つ必要がある。この発表では美術を英語で扱う CLIL 授業においてなされた評価に対する工夫の実践報告を行うことにより、日本の教育の文脈に配慮した CLIL 授業の評価のあり方に対する一案を提示したい。</p>	
14:40-15:00	<p>会員発表 10: 川畠嘉美 (石川工業高等専門学校)、鬼頭美帆 (石川工業高等専門学校)</p> <p>「STEAM 教育の“A”を担う CLIL—工業高専での英語教員による取り組み」</p> <p>工業高専のカリキュラム上、学生は STEAM 教育の STEM が充実する一方、“Art”に相当する芸術分野は学びの機会が極めて乏しい。アート教育は、「正解のないなかで自分だけの答えを見つける」という点で CLIL の 4Cs の一つである Cognition に大きく関わり、「自分とは異なる他者のものの見方にふれる」という点では Culture に深く関連し、問題解決能力を育成するためにも重要な要素である。本発表では、芸術分野を専門とする常勤教員不在のなか、英語教員がオンライン授業主体の令和 2 年度、同年度の授業を受けて改善を施した対面授業主体の令和 3 年度に実施したアート CLIL に関し、実践に至るまでの経緯、実践内容や工夫、学習者からの反応、課題やアンケートを受けての分析などを紹介する。</p>	日本語 Japanese
15:05-15:25	<p>会員発表 11: 二五義博 (海上保安大学校)、伊藤耕作 (宇部工業高等専門学校)</p> <p>「体育と英語の二刀流実現を目指す CLIL の実践報告—バドミントンの授業を事例として」</p> <p>これまでの体育 CLIL の研究では、サッカー、バレーボール、バスケットボール等の団体競技を分析対象としてきたが、今回は初めて個人 (ペア) 競技のバドミントンに焦点を当てる。研究方法としては、山口県内の国立工業高等専門学校 1 年生 2 クラス 80 名を対象として、挨拶など→ペアワーク (2 種類のドリル) →作戦タイム→メインゲーム→振り返りの流れで授業を実践し、授業後には選択式 (4 件法) と自由記述式を併用したアンケート調査を実施した。研究結果として、CLIL の 4C の視点から一定の成果が見られた。特に作戦タイムでは、英語解答例の足場かけが英語使用の割合の高さにつながった。また、ペアワークは、グループワークに比べ、学生同士のコミュニケーションや思考活動を活発にすることが分かった。</p>	日本語 Japanese
15:30-15:50	<p>会員発表 12: 小林志保 (大阪成蹊短期大学)、伊藤由紀子 (大阪成蹊大学)</p> <p>「CLIL 授業の英語での指導における大学の体育教員の意識の変容—身体表現・チアリーディングの授業についてのインタビューから」</p> <p>本研究では、大学で体育科目を担当する教員が、身体表現・チアリーディングをコンテンツとした CLIL 授業に 3 年間継続して取り組み、専門性の高いチアリーディングを英語で指導することへの不安を克服していくまでの変容を、半構造化インタビューを通して質的に分析した。その結果、ティーチャートークの繰り返しの入念なリハーサル等により英語に自信がつき、トークを拡張しながら学生と一体になって指導ができるようになった。また、CLIL をベースに運動の楽しさを伝えたいという思い、レクリエーションマインド、チアスピリットに英語という要素をプラスできたことで、指導の幅が広がったと感じていることがわかった。</p>	日本語 Japanese
15:55-16:15	<p>会員発表 13: 早船由紀見 (筑波大学大学院生)</p> <p>「理系大学生の英語リーディング CLIL 授業実践—燃料電池車作成キットを用いて」</p> <p>本発表では、環境問題につながる題材を用いた、CLIL を取り入れた理系大学生の英語リーディング授業の実践報告を行う。教材には、市販されている燃料電池車作成キットを用いた。このキットは、燃料電池を動力源とするプラスチックの車を組み立て、走らせ</p>	日本語 Japanese

	<p>ることができる。学習者は英語で書かれたキットのマニュアルを用いて燃料電池の原理を学び、車を組み立て燃料電池車を走らせる。マニュアルを教材とした内容 (Content) と言語 (Communication) の学習に加え、手を動かし動作を確認することで、学習者自らが言語と内容を結び付け深い学び (Cognition) へと発展させることができた。さらに、環境問題に関するニュース記事を読み、世界の国々の環境問題への取り組み (Community) について考えることで、4Cs をベースとした CLIL 授業を実践した。</p>	
16:20-16:40	<p>会員発表 14: 松島恒熙 (神戸工業高等専門学校)、清水将吾 (立教大学兼任講師・上智大学非常勤講師)、桑原旅人 (帝京科学大学非常勤講師)</p> <p>「哲学 CLIL の可能性とその展望—英語教育を哲学する」</p> <p>「哲学」という言葉を聞いて何を思い浮かべるであろうか？ CLIL においてなぜ哲学なのか？と思う人もいるかもしれない。しかし、むしろ CLIL だからこそ哲学なのである。その理由を明らかにするべく、本発表では英語教育において哲学的な授業を展開してきた3人がそれぞれの実践を報告し、その可能性と展望について考察していく。最初に、松島は哲学を用いたソフト CLIL とハード CLIL の実践について、ブルームの HOTS に着目しながら報告する。次に、桑原は教養英語において哲学書を読解し議論するという実践を報告し、その可能性と課題について考察する。最後に、清水は「英語で哲学対話」という実践を報告し、いかに哲学と CLIL の親和性が高いかを示す。以上の実践をもとに、今後の哲学 CLIL と英語教育の可能性についてフロアと共に議論したい。</p>	日本語 Japanese

Zoom room 3		
* Zoom access information has already been distributed to members and registered participants.		
13:00-13:20	<p>Members' presentation 15: Nicole Takeuchi (Osaka Seikei University and Osaka International University, part-time)</p> <p>'Teaching Reading to EFL Young Learners: Building Confidence Through a Phonics Based Reading Approach and Extensive Reading Comprehension and Fluency Strategies'</p> <p>This research explores a reading instruction method directed at elementary school aged EFL learners who have previously received basic phonics instruction. This method involves building on fundamental phonics knowledge and incorporates Extensive Reading comprehension and fluency strategies. As a result, it is found that through this method EFL students gain the ability and confidence to read the various texts which are presented to them in their language classes.</p>	English
13:25-13:45	<p>Members' presentation 16: Nate Olson (Sophia University, graduate student)</p> <p>'Student Perceptions of Team-Taught CLIL Unit on Human Happiness at a Japanese Senior High School'</p> <p>This presentation discusses the reactions of students (n=35) at a senior high school to CLIL lessons team taught by a Japanese teacher of English (JTE) and an assistant language teacher (ALT). Team teachers collaborated to create materials for eight lessons on the topic of human happiness. The presentation provides an overview of the unit's materials and its integration of CLIL principles with student-centered task and project-based learning. The quantitative results of a post-unit questionnaire showed positive responses to the content, cognition, and cultural aspects of the lessons. The qualitative results demonstrated students' appreciation of the unique contributions of native and non-native teachers, increased motivation and interest in learning content, and advocacy of translanguaging practices for scaffolding understanding.</p>	English
13:50-14:10	<p>Members' presentation 17: Andy Roomy (Tokai University)</p> <p>'Authentic Source Materials and CLIL Curriculum Design'</p>	English

	<p>One of the more difficult aspects of using the Content and Language Integrated Approach is the process of creating materials for CLIL classes. The first step is to clearly establish the basics of the curriculum such as teaching philosophy, methodology, and goals and objectives. Once these have been defined, one can begin the process of creating CLIL classes. In this presentation, I will show the steps that I used in curriculum design to create CLIL materials for a lesson on leadership in sport and leisure management. This paper will build upon earlier work that I have done in establishing a framework for teaching leadership in sport and leisure management and will use curriculum design tools I have developed for creating CLIL materials.</p>	
14:15-14:35	<p>Members' presentation 18: Miyuki Yukita (Toyo Eiwa University, part-time) 'Teaching Introductory Students How to Analyze Graphs and Charts in their Research Presentations'</p> <p>This presentation will explore how CLIL introductory students can describe graphs and charts accurately and relevantly in their research presentations. Research is one of the important tasks in CLIL. Through research, students collect data from outside sources and show clear evidence in supporting their opinions. However, for introductory students, that is not an easy task because graphs can be complicated. Just one image of a graph can show various information. Students should break down the information, adopt the correct style and identify the key data when describing it in class. A case study and its issues will be shown here.</p>	English
14:40-15:00	<p>Members' presentation 19: Hirosada Iwasaki (University of Tsukuba) 'Boosting the CLIL Audience's Understanding: Balancing Authenticity and Intelligibility'</p> <p>This study addresses problems in balancing authenticity and intelligibility among learners when the class is given in a CLIL fashion. While authenticity is prioritized in CLIL class, the problem still remains as to how to increase understating among Japanese EFL learners whose English proficiency is relatively low. This present study first shows that authentic materials often prevent the EFL audience from understating the content reasonably well, irrespective of whether the speaker is a teacher or a student. Second, the study shows that (a) recognizing low-frequency words and opaque expressions, and then (b) paraphrasing or rephrasing them with transparent expressions can boost understanding among those learners.</p>	English
15:05-15:25	<p>Members' presentation 20: Kiyu Itoi (Ritsumeikan Asia Pacific University) 'Students' Experience in a Translanguaging Dual-language CLIL Course: Implications for Researchers and Teachers' (CANCELLED)</p> <p>A dual language translanguaging CLIL course, in which students with various first languages learn English and Japanese respectively, was developed in a university in Japan. The aim of the study is to examine whether translanguaging in CLIL classroom can enhance students' learning by opening up spaces for diversity of linguistic repertoire in the process of meaning making and construction of knowledge. In this presentation, interview data of 12 students from eight countries from a qualitative study will be presented to explore students' experience in a translanguaging dual-language CLIL course. Namely, students' perceptions of translanguaging use in the classroom, and how the use of translanguaging affected students' meaning making process and identity construction will be discussed. In addition, advantages and challenges of employing translanguaging pedagogy in a dual language course will be discussed.</p>	English
15:30-15:50	<p>Members' presentation 21: Barry Kavanagh (Tohoku University) 'The Demon Slayer Phenomenon: What Can Anime Teach us about Differing Cultural, Social, and Political Perspectives?'</p>	English

	<p>This presentation describes a university CLIL course on media literacy that incorporates the study of the manga and anime series ‘Demon Slayer.’ Classes examined how the global response to the Demon Slayer phenomenon can give us an insight into differing cultural, social, and political perspectives. This was achieved in a series of scaffolded classes that gave students the vocabulary, structure, and grammar needed in order to take part in discussion, debate, and presentation. Using examples of student reports and feedback, this paper outlines how students learned to critically evaluate and understand contrasting cultural viewpoints through an analysis of the media reaction given to Demon Slayer on a worldwide scale.</p>	
--	--	--

